



SHUNKEN 2003-07 31-02

駿建

2003年夏期号 Vol.31 No.2 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

資格をとろう！

建築学科関連主要資格紹介

長引く不況を背景に、企業は年功序列や終身雇用を維持することが難しくなり、代わって自己能力重視主義へと移行、変化している。結果、わが国においても、欧米並みに資格を重視する傾向は強まり、資格取得を奨励し、昇進の条件とする企業が増加している。もちろん、一生が保証されるような資格はないが、実力主義の現代社会では、十分に武器となることは確実であろう。

しかし、闇雲に受験するだけでは意味がない。時代の流れと自分の能力に適した資格こそが、実力や努力の証明となる。このことは念頭におかなければならない。

ここでは、建築学科の各専門分野に関連した様々な資格を紹介する。興味ある資格や自分の能力に合っていると思う資格については、インターネットなどを有効利用し、詳しく調べてみるとよい。学生にも受験資格があるものも多いので、ぜひ積極的にチャレンジしてほしい。

設備関連〈環境・構造〉

建築設備に関連する資格は、単に施工や管理にとどまらず、防災や環境・安全衛生にかかわるものまで多岐にわたる。ここでは、設備関連従事者に取得の求められることの多い資格を紹介する。

建築設備士（国家資格）：建築設備全般に関する知識と技能を有し、高度化、複雑化した建築設備の設計・工事監理を行う場合の建築士に対するアドバイザー。建設業法の規定により、一般建設業のうち「電気工事業」・「管工事業」の営業所に置く専任の技術者及び主任技術者になることができる。以前は大学卒業後8年以上の実務経験を積まなければ受験資格を得られない大変難しい資格であったが、2003年度から一部変更になり、現在は2年以上に緩和されている。

管工事施工管理技士（国家資格）：冷暖房設備工事、下水道配管工事、ダクト工事、浄化槽工事、ガス配管工事などの管工事において、主任技術者または監理技術者として施工計画を作成し、現場における工程管理、品質管理、安全管理など工事施工に必要な技術上の管理などの措置を適切に実施することを業務とする。1級管工事施工管理技士は、管工事に関し高度の応用能力を有する技術者として指導監督の立場で、2級管工事施工管理技士は管工事に関し一応の応用能力を有する技術者として、それ

ぞれ現場の施工管理にあたる。

消防設備士（国家資格）：大きく甲種と乙種に分けられ、業務範囲はさらに第1類～第7類に区分されている。甲種は第1類～第5類の消防用設備の設置工事や整備及び点検を行うことができる。乙種は第1類～第7類の消防設備の補修や調整作業などの整備を行う。

危険物取扱者（国家資格）：火災その他の災害発生の予防上危険と考えられる引火性、または発火性の物品（危険物）を一定量以上貯蔵し、または取扱う危険物施設（石油精製プラントやガソリンスタンドなど）において行う危険物の取扱い作業、保安監督及び定期点検を行うことができる。

技術士・技術士補（国家資格）：概ね技術コンサルタントのことと違ってよく、二次試験に合格し登録すると技術士となる。機械部門、電気電子部門、建築部門、水道部門、衛生工学部門、経営工学部門、情報処理部門、その他がある。

上記の他、**建築設備検査資格者**、**建築設備診断技術者**、**労働安全コンサルタント**などの国家資格や、**空気調和・衛生工学会設備士**のような民間資格も多数ある。

（蜂巢浩生・専任講師）

▶OBコメント

求められる専門性

石井要憲

建築設備士、管工事施工管理技士1級、消防設備士甲種1類、危険物取扱者乙種4類、空気調和・衛生工学会設備士 空調・衛生部門

建築設備士：建築設備の設計、工事監理技術者の必須資格です。合格率約20%の難易度の高い資格であり、設備に関する広い知識と設計図作成能力が必要です。建築設備の実務を8年経験して受験しましたが、過去5年間の問題を何度も根気強く繰り返しようやく合格しました。設備工事は専門性の高い分野であることから、有資格者の知識・能力・経験を最大に生かすことを求められています。**管工事施工管理技士**：建築設備業における工事監理技術者の必須資格です。建設業法に定められた管工事業の許可を受けるには有資格者が必要です。設備施工会社では入社から3～5年程度経験した社員には早く取得することを勧められます。試験問題は設計知識、施工計画、品質管理、関連法規を含めた総合的な問題であり合格率は約30%です。官公庁の入札では会社の有資格者人数が評

価点数になり、工事受注にも影響しています。

消防設備士：屋内消火栓設備やスプリンクラー設備などの消防用設備工事をするには、必須の資格です。有資格者は劇場、百貨店、ホテル、事務所ビルなどの消火設備、自動火災報知設備の工事着工届を申請して、施工後は整備、点検を行います。火災から人命や財産を守ることができるように、専門的な知識と技術を持った有資格者は重要な役割を果たしています。

危険物取扱者：工場で使用される石油、アルコール、水素化合物などの危険物取扱作業に従事するには必要な資格です。石油タンク貯蔵所からのオイル漏れ、配管亀裂、バルブ開閉の人為的ミスなどにより火災・漏洩事故が発生する恐れもあり、有資格者は危機管理、安全対策が求められます。化学工場、ガソリンスタンド、石油タンク、タンクローリーなどで一定量以上の危険物を取り扱う施設には、有資格者を配置する必要があります。

技術士・技術士補：技術士は技術関連資格の最高峰であり、合格率約15%の難関資格です。「技術士一次試験」に合格すれば技術士補、「技術士二次試験」に合格すると技術士の称号を与えられ、科学技術に関する高度な能力を備えていることを国から認定されます。技術士の人数は企業の技術レベルを計る尺度として使われることもあり、自社の技術力向上、他社との差別化、社会に対するアピール性があることから挑戦している技術者は多数います。私も2002年度に二次試験を受験しましたが、ほとんどが記述式問題であり、午前・午後の問題あわせて12,000字程度を書き上げるスピードが足りずに不合格でした。技術士は科学技術に関する専門的応用能力を駆使して、公共機関や企業へ指導の業務を行いながら、独立したコンサルティング業務を行うこともできます。

略歴

1993年 大学院建築学専攻修了
1993年～ ダイダン技術研究所
1999年～ 同社東京本社設計部



構造・施工関連〈環境・構造〉

建築の構造・施工に関する主な資格を順番に説明してゆく。まず**技術士**について説明すると「学問の最高峰が博士なら、技術者の最高峰は技術士」と言う人もいるぐらいの資格で、合格へのハードルも高めである。技術士資格を取得するためには、まず1次試験（筆記試験）に合格する必要がある、合格後は技術士補として登録することもできる。その後、技術士（もしくは優れた指導者）の下で4年間の実務経験を積むことにより2次試験（筆記試験・口頭試験）の受験資格を得ることができる。その2次試験に合格して初めて技術士を名乗ることが可能

となる。技術士は建設をはじめとした19の技術部門に分かれており、さらにその中に選択科目がある。建設部門の場合には、土質及び基礎、鋼構造及びコンクリート、都市及び地方計画など11の科目に分かれている。それらの中から選択して受験することになるが、1次試験は大学生でも受験することができ、理工系大学で教わる程度の専門知識を有していれば合格も可能なようである。在学中に受験してみるのも良いと思う。技術士試験の受験者は圧倒的に建設部門を選択する人が多く、登録技術士の人数も他部門を圧倒している。この理由は、会社に技術士がいることを公共事業などの入札資格にしているため、就職先によっては必須の資格となるかもしれない。

1, 2級建築施工管理技士は、建築工事を実施するにあたっての施工計画、工程管理、安全管理、品質管理などを行うための技術を検定する国家試験に合格した人だけが名乗ることができる。1, 2級の区別は対象工事の規模による違いであるが、建築学科を卒業した人であれば1級の資格を狙って当然だろう。ただし、受験資格は大学卒業後3年間の実務経験が必要なので、就職後に受験することになる。試験は学科試験と実地試験（記述試験）があり、一級建築士の場合には学科試験が免除になる。建築施工管理の職に就いた人は必須の資格になると思う。

コンクリート主任技士・コンクリート技士は、コンクリートの製造、施工、管理及び研究などを実施する能力のある技術者の資格としてコンクリート工学協会が認定している。受験資格として、技士は2年以上、主任技師は4年以上の実務経験が必要とされており、コンクリート関連の研究に携った人はぜひ受験してみると良いだろう。

Professional Engineer (PE) は、アメリカにおける技術者の認定制度であるが、国際的な資格として取得を奨励している会社も多いようである。PEになるためには1次試験（Fundamental Engineer 試験）に合格後、4年間の実務経験を積んで2次試験（PE 試験）に合格する必要がある。1次（FE）試験は4年制大学を卒業または卒業見込の人に受験資格があり、設問・解答ともに英語で行われるため工学基礎能力と技術英語力を同時に証明できることになる。試験は日本でも実施されているので大学院在学中にでも合格しておけば就職活動時に役立つかもしれない。

建築構造士は、社団法人日本建築構造技術者協会（JSCA）が認定登録を行っている資格で、原則として一級建築士の資格取得後に建築の構造設計に関する4年の実務経験が受験資格として必要になる。現在学生の人がトライする時期はだいぶ先になると思うが、構造設計業務に就いた人は意識しておく必要があるだろう。

以上、紹介した資格の中で在学中に受験できるものは少ないが、近い将来建築構造・施工に携わることになっ

た人たちは、間違いなくいずれかの資格試験を受験することになると思う。またエンジニアとして世界的に活躍したいと考えている人は、前述のPE以外にも**APECエンジニア**という登録制度があり、技術士などの要件を満たす資格を取得後に申請すれば、海外で活躍できる技能を証明してくれる。自分の可能性を拡げるためにもぜひ資格試験にチャレンジしてもらいたい。(石垣秀典・助手)

▶OBコメント

資格取得について

前中敏伸

技術士(建設部門)、一級建築士、一級建築施工管理技士、
コンクリート主任技士、コンクリート診断士

私が資格について意識したきっかけは、大学の先生がおっしゃられた「一級建築士なんか足の裏の飯粒じゃ」という一言だ。つまり、「気になるから取っておく」という意味である。学生の私にとって、「資格なんてそんなものか」と考えたことに始まった。大学を卒業して社会に出て資格についていろいろ考えることも多かった。その結果、資格というものは上手く使えば役に立つし、使い方が悪ければなんの役にも立たないことに気がついた。つまり、足の裏についた飯粒を上手く使えば糊になるし、下手に使えば捨てるだけである。

私は学生時代に白井研究室に在籍し、コンクリートに関する卒論・修論をまとめさせていただいた。それ以来、会社に入ってもなぜかコンクリートに関する業務が付きまとい、それが延々と今でも続いている。そのうちに「この分野を自分の得意技にしてやろう」という気持ちにいつしかなっていた。サラリーマンを続けていると、自分の好きな仕事と嫌いな仕事が出てくる。仕事をするのであれば自分の好きなもの、つまり得意なものや興味のあるものを行いたいものである。せっかく「得意技」という人より優れる面が自分にあるならば、そのことを周囲にアピールして少しでも自分の好きな仕事をやり続けたいと考え、自分の能力をアピールする手段として資格を使ってやろうと考えた。

これまでに数多くの資格試験を受けてきたが、試験勉強の方法は学生時代と同じように、過去問を解いたりすることが多かった。しかし、学生のときの試験勉強とは異なり、問題の内容がそのまま業務内容に結びつくことが多かった。特に現場に勤務していたときなどは「あっ、これ昨日やった問題にあった」とか「コンクリートの試験方法が違うんじゃない」などと思いながら、業務と試験勉強を一体化することができた。そのため、試験勉強は毎日遅くまで頭の中に詰め込んだが、その詰め込んだ内容が常に整理され応用が利きやすいようにインプットされていた。そのため、勉強していても苦にならず、考え方も前向きにできたため、コンクリートに関する種々の資格に合格することができたと考えている。

学生諸君の多くは今後数年のうちに社会に出て、自分の生活を自分の手で築きあげなければならない。今日の日本社会は、高度成長期のような右肩上がり・年功序列型・護送船団方式などの社会構造は完全に崩壊し、グローバル化・ボーダレス化という言葉に代表されるような大競争時代であり、同業者やライバルもたくさんいる。そんな中で生き延びていくためには、自己をアピールして得意技を駆使できる人間になるべきであり、そのアピールの手段として「資格」というものが有効に使えるということも覚えておいていただきたい。

略歴

1993年 大学院建築学専攻修了
1993年～ 竹中工務店
現在 同社技術ソリューション本部



設計・インテリア関連〈設計・計画〉

建築学科を卒業し、将来建築に携わる人は「建築士」の資格取得を目指すことになります。一言に建築士といっても、**一級建築士**、**二級建築士**、**木造建築士**の3種類があります。その違いは建築士法に定められているので詳しく調べていただくとして、簡単には、木造建築士<二級建築士<一級建築士というように、資格の違いによって設計・工事監理ができる建築物の規模や用途の範囲が広がるということで、不等号が示すように一級建築士であれば全ての種類の建築物を規模や用途を問わず設計・工事監理ができることになっています。

建築士制度は1950年に制定された建築士法によって、一級建築士(国土交通大臣免許)と二級建築士(都道府県知事免許)が誕生し、木造建築士(都道府県知事免許)は、1984年からスタートしました。木造建築士は、その名の通り木造2階建て300㎡以下の木造建築物の設計・工事監理ができるもので、伝統木造建築の施工技能者に取得者が多く、その数は一級・二級に比較して少ないのが現状です(一級/約30万人、二級/約65万人、木造/約1万3千人/2002年3月現在の登録人数)。

これらの資格も、建築資格制度の国際化の動きを受けて、建築士制度改善の動きが各種建築関係団体で見られます。例えば2001年には日本建築士会連合会から現行建築士制度の中にさらに「統括」、「構造」、「設備」、「生産」、「行政等」、「伝統木造」の六つの専門領域(コース)を設けようとする「専攻建築士制度」が提案されました。日本建築家協会も経過措置としてこの提案に賛同し、新制度を巡って活発に議論されはじめたところです。皆さんが実社会の第一線で活躍する頃には、建築士に加えてこのような新しい制度が加わっていることも考えられます。

さて、皆さんが近い将来受験する一級建築士の試験は、

ここ2、3年特に難しくなっています。昨年（2002年度）の合格率は、学科試験10.4%、設計製図36.5%、最終合格率は6.4%でした。受験人口が少なくなってきたこともあり、合格者は全国で3,733人、1997年度の合格者数に比べると約半数に激減しました。2000年度までの最終合格率は、11%台を推移してきましたが、それに比べると、昨年は5ポイント程度下がったことになります。

一級建築士を目指す受験生にとっては年々試験を取り巻く環境は厳しくなっているという印象を受けますが、逆に言えば、この資格を取得する価値が以前に比べて高まっていることを示しているともいえます。建設業界全体をみても新たな資格取得報奨制度を設ける企業や、昇級・昇格要件の一つに一級建築士資格取得を挙げる企業も増加してきています。優秀な技術者の育成・獲得が企業の死活問題となっている現状をうかがわせ、建設業界に身を置く我々にとってこの資格はこれまで以上に重要になってきているといえます。

インテリアデザイン関連の資格としては、インテリア・プランナー、インテリア・コーディネーターなどの民間資格があります。これらの資格は建築士のようにその資格を有していないと一定の業務ができないものではありませんが、資格を持っていれば社会的にも顧客に対しても信頼度が増すというものです。

インテリア・プランナーは、1987年に創設された比較的新しい制度で、住宅を含む様々なインテリアが専門で、具体的な設計や施工管理に至るまでをトータルに行えるスペシャリストです。インテリア・コーディネーターは、1983年からスタートしたもので、主に住宅の室内が専門で、居住者と施工者の間に立ち、快適な住空間を造り出していくものです。両者とも主な活躍の場は住宅メーカーやインテリア関連企業になります。

また、商店やデパート、展示場といった施設のディスプレイ、販売設備の設置、工事監理などを行う**商業施設士**、マンションのリフォームを円滑に行うための橋渡し役を行う**マンションリフォームマネージャー**などもあります。

（渡辺富雄・専任講師）

▶OBコメント

一級建築士という資格

中山 農
一級建築士

建築学科の皆さんにとって一級建築士は最も興味ある資格の一つだと思います。試験は建築の知識を幅広く問われる学科試験と、計画能力及び作図能力を問われる製図試験に分かれますが、いずれもパスすることは容易ではありません。事実十回以上の受験を繰り返し、ようやく資格取得に至る方もいます。この2年、一級建築士取得は非常に難しくなったと言われており、過去の合格者

データには難化傾向が顕著に見て取れます。不況日本の縮図である建設業界で今まで過剰供給であった一級建築士の数に歯止めがかけられているかのようです。しかし不況の世の中だからこそ資格がものをいうこともまた事実です。在学中の皆さんにとって一級建築士資格試験はまだ先のことに感じるかもしれませんが、日々受講されている様々な講義の内容が試験問題のベースになっています。私がこれに気づいたのは、残念ながら卒業後、受験勉強に取り組み始めてからでした。資格取得のために講義があるわけではありませんが、専門外であっても近い将来の試験に向けて知識を蓄えておくことよと思います。

私は今、中規模の設計事務所に勤めていますが、まだ経験もなくいろいろ学ぶことの多い毎日です。一方、私の周りには豊富な経験を持つ所員が多くいます。しかし、その人たちが必ずしも一級建築士であるわけではなく、取得に向けて努力している人もいます。資格の有無と仕事が決まることはまた別のことです。一級建築士とはいえ、それぐらいの資格なのかもしれません。しかし、大企業になればなるほど資格が重要視されるのも現状です。それは「資格保有者数＝企業力」として見られることが少なくないからです。私は幸運にもさほど受験回数を重ねることなく取得できましたが、皆さんもできるだけ早く、若いうちにサラッとパスしてください。

略歴

2001年 大学院建築学専攻修了
現在 伊藤喜三郎建築研究所



福祉関連〈設計・計画〉

福祉住環境コーディネーター検定試験：1999年5月から、東京商工会議所が実施している検定試験です。高齢社会により高齢者・障害者に対する住宅改修・福祉用具に関するニーズはますます高まっています。それらの相談・実施・購入にあたっては、関係する知識を持ち、医療、社会福祉、建築などの専門職との連携も、より重要となってきています。こうした住環境に関する基礎的な知識の普及と、専門職相互の連携ができる人材の育成を目的としてつくられた検定試験です。

合格者に対しては、福祉住環境に関する一定の知識があることを認定するもので、ある業務に携わることができるといった資格試験ではありません。また、受験資格も2、3級では特にありません。検定試験合格者は、実務においてバリアフリー住宅や医療・福祉関係の専門施設の新築、リフォームのコーディネート、福祉用具などの選択と利用法のアドバイス、福祉・保険サービスなどの情報提供などの業務が期待されています。

試験は、1級（2002年度から実施）、2級、3級があり、3級は、社会福祉と障害、医療、ならびに建築、福祉用具に関する基礎的な知識を求めています。2級は、それに加えて知識を総合的に勘案しながら実務にいかし、具体的な解決策を提案できる能力を求めています。さらに、様々な専門職との連携のために必要な知識が必要です。1級では、新築や住宅改修の具体的なプランニングができ、さらに安全で快適なまちづくりへの参画など、幅広い活動ができる能力を求めています。出題範囲も幅広く、初回ではかなり低い合格率でした。

これまでの2、3級合格者をみると、すでに何らかの専門職資格を持つ者が多いようです。最も多いのがホームヘルパーであり、続いて建築士、介護福祉士、介護支援専門員（ケアマネジャー）のほか、建築・インテリア系資格、看護・医療系の有資格者なども多いようです。2001年度から、2級合格者においては厚生労働省により介護保険制度において介護支援専門員のように住宅改修費支給を受けるための理由書が作成できるようになりました。

『日経アーキテクチュア』誌の調査によると、現在、一級建築士資格を持っている人が、新たに取りたいと考えている資格のなかで、いちばん多いのが、「福祉住環境コーディネーター」16.7%で、2位の「技術士」9.8%を大きく離しています。また、一級建築士未取得者が取りたい資格においても、1位「一級建築士」44.7%に次いで、2位11.9%に位置しています。

このように、建築関係の仕事をしている人々に関心が高いのは、同誌によると「今後も安定したマーケットが見込める」ためであると考察しています。たしかに、ここ数年、建設業の業績は前年比マイナスが続いています。しかし、唯一「医療・福祉関連施設」に限れば、このような状況にもかかわらず毎年順調に成長していることがわかります。高齢社会の到来と国民の医療・福祉施策への関心の高まりが、今後とも福祉がビジネスの場として成長を続け、注目される時代は続きそうです。

とはいえ、建築やインテリアの設計などにかかわる人は、2、3級レベルの知識を身につけておくと、クライアントからの要求に細かに応える技術的な方法が身につくだけでなく、「社会の中の建築」として、自分が創り出す建築や製品への社会的役割が大きいことに気づく、よい機会になると思います。

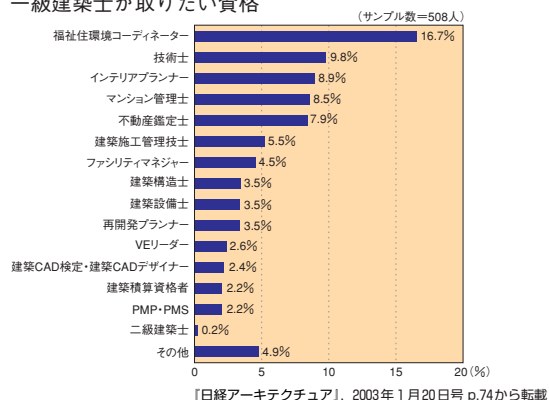
関連情報 <http://www.kentei.org/fukushi/>

(八藤後 猛・助手)

2002年度の試験結果

	実受験者数	合格者数	合格率
1級	11,456人	47人	0.41%
2級	84,078人	17,485人	20.8%
3級	68,273人	29,394人	43.1%

一級建築士が取りたい資格



保存・修復関連〈設計・計画〉

近年、保存修復の仕事は増加する傾向にあります。保存修復には大きくハードな取り組みと、ソフトな取り組みがあります。ハードな取り組みとは、これまでに行われてきた「文化財」として建物を残すという態度です。この場合は単に古いものをそのまま残せばよいというわけではなく、学生時代に考えるよりも相当にクリエイティブな思考が必要です。代表的な職場としては、行政法人文化財研究所（東京文化財研究所、奈良文化財研究所など）、財団法人保存技術協会、各都道府県・市町村の文化財係などがあります。重要文化財に指定されるような保存・修復は前三者が主体となる場合が多く、県・市指定文化財の保存・修復業務には各地域の設計事務所や時には大手ゼネコンが参加する機会が増えていきます。

ソフトな取り組みとは、リサイクル、リユースを含めた文化財を保存・再生して活用する場合を指しています。この場合には創建時のままの保存ではなく、本来の機能にはなかったレストランやギャラリーなどの機能を付加して再生・活用するものです。このような活動は広く設計事務所・ゼネコンが参加しています。1990年代まではイベント的な事例が多くみられましたが、最近では相当に中身の濃い再生・活用計画がみられるようになっていきます。市民運動の高まりから保存・再生のアプローチやプロセスに少しお金がかけられるようになった面があり、設計事務所の仕事としてペイするように（儲かるようになった？）といえるのかもしれませんが。

仕事が増えているといってもまだ決して多くはありません。現在行政が実施している登録文化財への申請からかわって初めて仕事になるような長期的な仕事も増えています。これらの仕事への参加資格は現在はなく、一級建築士さえ持っていれば可能ですが、過去に実績がないと入札指名が受けにくいのが現状です。行政法人や財団法人でこれらの仕事にかかわりたければ、各機関が実施しているセミナーや研修に参加することから始めると

よいでしょう。設計事務所でこのような業務に携わりたければ、様々なNPOが実施している保存活動や全国町並みゼミなどの集会・研修に参加してネットワークを広げておく必要があります。どのグループにも設計関係者が参加しています。就職のためだけでなく、このような仕事を行うには過去の保存・修復・再生にかかわった先人からのアドバイスが不可欠です。住民や行政担当者などの意向をくみ取る包容力と、それらをまとめながら引っぱってゆくエネルギーを持っている人に向けた仕事といえるでしょう。(重枝 豊・専任講師)

▶OBコメント

保存・修復

野口 聡

ここ数年、歴史的建造物の「保存再生」が話題を集めています。「旧岩崎邸」や「横浜赤レンガ倉庫」などのリニューアルが話題を集め、賑わいをみせている一方、取壊しについての是非が論議された「旧正田邸」や「同潤会・大塚女子アパート」などは残念ながら取壊しが始まっています。こうした保存運動は取壊しの危機に瀕したときに初めてクローズアップされ、どのような財源で改修し、どのような用途で活用・維持していくかということについては具体的な議論や提案も多くの場合されないまま、改修費用の金額の大きさが主に取壊しの決定を作用していることと思われます。

昨今、建替えトラブルなどが頻発している分譲マンションに関しては、円滑に対応する人材の必要性を鑑み、「マンション管理士」「管理業務主任者」などの資格が創設されています。一方、歴史的建造物の保存・修復に関する専門の資格（設計監理をする建築士を除く）は、現時点では存在しません。既存建物を再利用する経費が建替え経費を上回ることもままありますが、長い年月を風雪に耐えてきた歴史的建造物を再生することで、人々に与える懐かしさや感動、またその魅力に惹き付けられて起こる賑わいなどの「数値化しにくい経済効果」を評価し、建替え検討の際にも考慮されるような社会的な仕組みも必要だと思います。最近の保存再生事例としては、昨年に改装オープンした「旧小笠原伯爵邸」（1927年創建）が幾度かの取壊し危機を免れ、民間事業者への貸付（修復、公開を前提条件）による再生活用が図られ、レストランとして活況のようです。こうしたPFI事業（民間資本などの活用による公共施設の運営活用）による保存再生は新たな方向性であり、建築の設計関係者のみならず、施工技術者、事業プランナーなどの様々な分野の専門家のコラボレーションが不可欠となり、それに対応する人材も求められてくるものと思います。また、「ナショナル・トラスト」などの修復・保存を支援する団体や、街づくり関連のNPO団体も全国各地で見受けられます。

身近なところでは、「川越蔵づくりの会」や「伝統技法研究会」などで、セミナーや現地実測、御掃除会などの様々なイベントが行われ、学生でも気軽に参加できます。フィールド調査やまちづくり提案、保存検討建物の実測調査、修理への協力（清掃、片付け、簡単な修繕など）など、建築学科の学生としてできることからでも社会や地域に積極的にかかわることで、そのような経験の積み重ねが自身のスキルアップにも繋がります、有益なことであると思います。

略歴

1988年 大学院建築学専攻修了

1988～1998年

建築研究所アーキヴィジョン

1998年 創建アトリエ設立



都市計画・不動産関連〈企画経営〉

都市プランナーを目指す場合、建築士のような業務独占資格（その資格を有していないと一定の業務ができないもの）はなく、誰でも技術さえあれば仕事ができる。ただし、独立してコンサルタント事務所を開設して自治体から都市計画業務を受託するような場合は**技術士**（建設部門の中に「都市及び地方計画」という分野がある）という資格がものをいう。計画系の学生にとって工学基礎を勉強しなければならないのはつらいが、在学中に1次試験を受け、技術士補（詳細は構造分野参照）となることもできる。ほかにまちづくりの関連では、再開発計画の立案や権利調整を行う再開発コーディネーターの資格として、**再開発プランナー**（OBコメント参照）がある。一定の実務経験が必要なので将来取得可能な資格ということになる。同様に土地区画整理事業を推進する専門技術者の資格である**土地区画整理士**もある。

不動産関連資格は多いが、その中でも一番の難関資格であり社会的信用も高いのが、不動産売買の際の鑑定評価や地価公示価格の決定など不動産の価値を適正に判断することを業務とする**不動産鑑定士**である。受験資格に制限はなく、大学を卒業すれば1次試験も免除される。最大の難関である2次試験に合格後、不動産鑑定士補となって一定の実務補習を受け3次試験に合格して初めて資格を取得できる。難関とはいっても、大学院在学中に2次試験をパスした先輩もいる（OBコメント参照）ので、ぜひチャレンジしてほしい。もっと気軽に学部生でも受験できる資格に**宅地建物取引主任者**（通称宅建）がある。不動産売買の際に重要事項を説明するのが業務であるが、事業所ごとに一定の割合で有資格者を設置することが義務付けられており、住宅・不動産系の企業に就職する場合に資格を取得しておくくと有利になる。わずかながら資格手当を支給している企業もありテキスト代

くらい回収できる可能性も高い。例年学部就職対策の一環として講習会を開催しているので3年次に受講するとよい。特に企画経営コースの学生は必須資格と考えてほしい。ほかに学部生でも受験できるものとして、2001年度に新設された新しい資格であるマンション管理士と管理業務主任者がある。前者はマンションの管理組合に対して管理上のアドバイスを行い、後者は管理委託契約の際の重要事項説明などのマネジメント業務を行うもので、さらにニーズの高まる資格として期待されている。

ほかにも将来の開業を目指す場合に役立つ資格は多い。土地や建物の調査・測量を行い登記手続きなどの業務を行う資格として土地家屋調査士がある。受験資格の制限はなく学部生でも受験可能であるが、実務能力も試されるので独学では難しい。測量に関しては、建設全般の公共測量などを業務とする測量士があり、これも受験資格の制限はないが、測量士補試験に合格して一定の実務経験を積むなどが必要になり取得までに一定の期間を要する。純粋に不動産系の資格ではないが、不動産も含めた資産運用のアドバイザー資格としてファイナンシャル・プランナー（FP）がある。国家資格ではないが人気の高い資格である。基礎的な資格としてのAFPと、その上位資格で国際的にも通用するCFPがあり、まずAFPを取得することになる。AFP資格取得には日本AFP協会の認定研修を受ける必要があるが、ダブルスクール覚悟なら在学でも取得可能である。一定の実務経験を必要とするため、在学中は関係ないが将来取得可能な資格としては、建築物の維持管理の専門技術者の資格である建築物環境衛生管理技術者や、ビル経営の専門家資格であるビル経営管理士などもある。（根上彰生・教授）

▶OBコメント

再開発プランナーについて

三本英人

一級建築士、再開発プランナー、
宅地建物取引主任者

私は現在、東京23区内の都市再開発法に定める市街地再開発事業を担当しています。

都市の再開発を進めるには、その地域の権利者、民間企業、地元行政などの合意形成を図っていくことが一番重要になります。また、再開発で生まれる建物は商業、業務、住宅といった複合建築になります。それらをまとめていくにはプランナーとして建築技術的な知識はもちろん、それぞれの関係者のニーズに沿ったプランをつくり、実現するために協議、交渉を進めていくスキルを求められます。再開発プランナーは現在では国の認定などによらない任意の資格ですが、実務経験及び市街地再開発事業に関連する基礎的知識（都市計画、建築、不動産など）と専門的知識（都市再開発法）が試験科目に設定されており、市街地再開発事業だけにとどまらず共同事業、

マンション建替、不動産の証券化などこれからのまちづくりを進めていく専門家のために活用されています。ディベロッパーや建築などコンサルタント、行政を志望される方に有用な資格です。

略歴

1992年 大学院建築学専攻修了
1992年～ 住宅・都市整備公団
現在 都市基盤整備公団（都市再生機構に移行予定）土地有効利用事業本部



▶OBコメント

不動産鑑定士2次試験に合格するために 長谷川 玄

不動産鑑定士（2次試験合格）、宅地建物取引主任者、
管理業務主任者、日商簿記3級

私が不動産鑑定士になると決意したのは、大学3年のときでした。学生で比較的時間がとれる間に、社会に出て武器になるモノを取ろうと考え決意しました。最初独学で合格しようと思ったのですが、友人に聞き独学をあきらめ、ダブルスクールとしました。

鑑定士を目指す学生には、中島講師の鑑定評価理論（企画経営コース設置科目）の受講をお勧めします。宅建のときは独学でやりました。宅建、管理業務主任者は鑑定士と異なり比較的合格するのが容易な資格で、試験範囲も重なっているので、ぜひ受けることをお勧めします。また就職活動のとき、自動車免許しか書くものがないのと異なり、ある程度勉強した証にもなるはずです。

勉強を続けるうえで最も必要だと感じたのが親友です。例え違う勉強をしていても、懸命に頑張っている友人を見ると自分も頑張ろうと思いました。皆さんも良い友人を作り、勉強を頑張ってください。

略歴

2002年 建築学科卒業
2002年～ 大学院不動産科学専攻



公務員試験

まず、公務員及び公務員試験は、本号の特集となっている「資格」とは若干異なることを述べておきたい。公務員は職業であり、大学卒業後の進路のひとつである。公務員試験は民間企業にもある就職試験（SPI、筆記試験、面接試験など）と同列に並べられるもので、免許が与えられたり、試験合格により特定の機関に登録される「資格」とは違う。しかし、世間では『国家公務員採用I種試験合格者』というタイトルは国家の業務を担う（優れた）知識を持った人という認知があるのも確かである。その現われのひとつとして、国家公務員I種試験（以下「国家I種」と表記）の合格者数は大学の評価にもつなが

り、ひとつの大学で10名以上の合格者が出ると新聞（全国紙）に掲載される。2002年度では1位東京大学436名、2位京都大学176名、3位早稲田大学106名と続き、日本大学は23位の10名（うち理工学部は6名）となっている（なお、2001年4月現在で全国に大学は670校（国立99、公立74、私立497）ある）。

公務員は大きく分けて国家公務員と地方公務員がある。建築学科卒業・建築学専攻修了の学生がもっぱら受験するのは国家公務員ではⅠ種、Ⅱ種、防衛庁Ⅰ種など、地方公務員では都道府県、政令指定都市、東京都特別区、市町村、警察官・消防官などがある。国家公務員は毎年一定人数の採用枠があるが、地方公務員の場合は年によっては建築技術職の募集・採用がない場合もある。試験は1次多肢選択式、2次記述式+面接という場合が多いが、内容や出題傾向はもちろんそれぞれの試験で異なるので、詳しく確認することが必要である（紙面の都合上詳述は省く。理工学部就職指導課には各種の資料が揃っており閲覧可能）。1次試験は国家Ⅰ種が2003年度より5月初旬に行われるようになった。国家Ⅱ種や地方公務員は6月から7月にかけての日曜日に実施される。ほとんどの試験がお昼を挟んで実施されるため、弁当持参で“ちょっとしたピクニック気分”も味わえる。最終合格者は次年度4月から公務員として勤務を始め、最初のうちは2、3年に1度所属替えがあり、現場に直面しながらいろいろな仕事を覚えることになる。なお、国家Ⅰ種のみは合格後採用候補者となり3年間にわたって採用機会が与えられる。

最後に、現在、理工学部就職指導課では「国家・地方公務員を志す諸君へ」という冊子を編集集中である。その内容は、卒業生からのメッセージや試験の概要、合格体験記・失敗談などを織り交ぜて公務員と公務員試験の実態を詳しく説明するガイドブックとなる予定である。7月の公務員ガイダンスで配布されるので、公務員に興味のあるなしは別にして一度は手に取って目をとおしてみたい。
(宇於崎勝也・専任講師)

▶OBコメント

建築職の公務員として

池田文洋

一級建築士、宅地建物取引主任者、建設業経理事務士2級、日商簿記3級、被災宅地危険度判定士、東京都防災ボランティア(建築物の応急危険度判定)

昨年春、国家Ⅱ種で採用されて3年間勤務した官庁を退職し、今の役所で再出発することになった。「どうして国家公務員を辞めてまで、区役所に来たのか。」何度となく同じ質問をされたが、答えはいつも同じだ。どうしても都市計画や街づくりにかかわる仕事があったというのが私の回答である。

そもそも、民間施設が圧倒的多数を占める建築の世界では、道路や河川といった公共施設を対象とする土木の

世界と比べると行政の仕事の部分は小さい。それでも私が地方公務員という仕事に惹かれたのは、学生時代の専門が都市計画だったところが大きい。また、私が就職を控えていた頃は建設・不動産の開発部門が縮小に入っていた時期でもあり、都市計画や街づくりの実践のためには、自治体職員として長い時間スパンで地域に関わっていくのが最善ではないかと考えていた。

結局、少し回り道をして念願の自治体職員となり、都市整備部指導課に配属されることになった。昨年1年間には建築監察担当として違反建築の調査や是正指導をしてきたが、この4月から隣の細街路係へ異動となり、狭あい道路の整備助成をしている。どちらの仕事も丸の内や六本木の不動産開発のような派手さはないが、建築指導行政を通じて街づくりを末端で支えている、非常にやりがいのある仕事である。

地方公務員の場合、建築職の主な仕事は次の3系統に分けられる。なお、③については建築職よりも土木職や事務職が中心となるところが多い。

- ① 各自治体で所有している施設の営繕業務（新築・改修に伴う設計・積算、工事監理など）
- ② 建築行為に対する確認審査・指導
- ③ 都市計画や街づくり、再開発などに関する仕事

これに対してⅡ種採用される国家公務員の場合、大半の官庁では①にあたる各官庁所管施設の営繕の仕事のみであり、②③の仕事にかかわる機会はない。また、霞ヶ関の本省採用よりも、地方整備局営繕部や国立大学施設部などの出先機関での採用が多い。私自身も以前は関東財務局という財務省の出先機関で、公務員宿舎の建設や維持管理にかかわっていた。時代の趨勢で新築よりも改修工事を中心であったが、発注者の立場で建築にかかわれる仕事というのは、ゼネコンや設計事務所では経験できない貴重な経験だった。

公務員志望の学生に最初に勧めたいことは、一緒に勉強したり、情報交換できる仲間をつくることである。公務員の内々定が出るのは夏の終わりから秋に掛けてがピークであり、年末や年明けに採用が決まることも珍しくない。同級生が民間への就職を決めていく中で黙々と受験準備を続けていくためには、同じ立場の仲間が必要であろう。私が在学中に公務員を目指していた頃、現役公務員の研究室OBにいつでも相談できたというのも大きかった。もし公務員試験に関して何か相談があれば、都市計画研究室を通じていつでも連絡いただきたい。

略歴

1999年 大学院不動産科学専攻修了
1999～2002年 財務省関東財務局
2002年～ 足立区都市整備部指導課

新任講師紹介

五十田 博先生 (非常勤講師・一般講義Ⅱ)

略歴

1992年 東京大学大学院工学系研究
科博士課程中途退学
信州大学工学部社会開発工
学科助手
現在 建築研究所構造研究グル
ープ主任研究員



独立行政法人建築研究所にて、構造研究グループに属し、研究活動をおこなっています。最近の研究課題のキーワードは、リニューアル、長寿命化、リサイクル、リユース、そして環境問題に適応したハイブリッド構造などで、構造といえども研究課題に環境問題という視点が加わり、さらに、研究内容も多様化しています。開発研究では常に、構造と機能の融合、そしてものになる開発、つまり実際に建つものをつくることを心がけています。そして、機能を考えたものづくりの礎が、建築構法という分野だと思います。(いそだひろし)

榎本弘之先生 (非常勤講師・デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



城北埼玉学園 近藤記念ホール

略歴

1977～1983年 東京大学大学院修士・博士課程
1979年 設計組織アモルフ設立
1995年 榎本弘之建築研究所設立



建築には素晴らしい力があります。それは人を幸せにできるという力です。建築の設計とは、単に壁や屋根の形を考えることではありません。壁や屋根で囲われた中で、どんな生活が営まれるのか、人はどう感じてどう動くのか、それを想像力を働かせて突き詰めることによって、建築は《新しい生活》を提案することができ、人はより豊かに生きられるようになるのです。設計課題の最中はずらいつきも多いでしょうが、実は幸せな生活を思い描いてワクワクでき、綺麗な図面に仕上げたときに大きな達成感を得られる、非常に楽しい時間なのです。(えのもとひろゆき)

川口英俊先生 (非常勤講師・デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



Kクリニック

略歴

1987年 早稲田大学理工学部建築学科大学院修士課程修了
1989年 エール大学建築学部大学院修士課程修了
1989～1993年 エミリオ・アンバース&アソシエイツNY勤務
1994年 アーキテクト・キューブ設立
現在 同代表取締役



「建築の設計」は、私たちがいる社会と多様なかわりを持ちながらできあがるものです。決して自分一人の独壇場でデザインすることはありません。だから難しくも面白いのです。大学は、特定の専門分野を目指した人たちが集まった社会でもあります。特に本校は学生の人数が多いわけですから、一つの課題に対する答えもそれだけ数多く、多方面から考えるチャンスがたくさんあり非常に有利な環境におかれています。大学では常に他人と議論し、建築を取り巻く周辺の知識も身につけて、フレキシブルな建築の考えを磨いていって欲しいと思います。(かわぐちひでとし)

高階澄人先生
(非常勤講師・デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



virgo & muro つつじヶ丘



略歴

1984年 日本大学理工学部建築学科卒業
1984～1993年 芦原建築設計研究所
1995年 Pratt Institute N.Y. 建築学修士 M.Arch
2001年 高階澄人建築事務所設立

建築の設計に限らず、ものを作るということは自分を外化させる行為だと考えています。表に姿を顕わすものとその裏に織り込まれるものとのバランスをとり、骨格を与えるには一貫した「考え方=哲学」が必要であり、その思考プロセスにおいて自分自身や社会と向き合い、よく考え、判断を下すことが常に要求されます。時には自分と闘う辛い作業ですが、形が顕れたときの喜びは例えようもなく嬉しいものです。僕も日々その闘いを繰り返し返さざるを得ないのですが、学生時代ならではの徹底した技術的基礎訓練や自由な発想のための自己解放の期間を持つことは、とても重要であるように思います。

(たかしなすみと)

山口幸一郎先生
(短大 副手)

略歴

2003年 日本大学理工学部建築学科卒業



今春、理工学部建築学科を卒業し、短期大学部建設学科の副手をやらせていただきます山口幸一郎です。

学部では小石川・田所・森田研究室に所属し、コンペなどの活動をしつつ西洋建築史や建築論の知識を深めていき、本来ならば就職し学校から離れていくところを、縁あってまた大学とかかわっていくことになりました。

僕自身、まだ至らない所も多く、「先生」の立場にはいますが、専任や非常勤の先生方に対しては学生・学生に対しては先生という副手の立場を最大限にいかして、自分自身も成長していければと思っています。

(やまぐちこういちろう)

上利益弘先生
(短大 非常勤講師・視覚伝達デザイン)

略歴

1980年 日本大学理工学部建築学科卒業
1997年 コロンビア大学建築大学院
大学修士課程修了
現在 アガリ・アソシエイツ代表
建築学科非常勤講師



日本大学卒業後、政府給費による留学を経て、帰国後デザイン・コンクールなどに多数入賞。現在は、都市・建築・インテリアの設計やマネージメントを執り行う一方、日本建築家協会でのUIAやUNESCOにかかわる国際活動を軸に、建築学会などを通して建築教育の国際水準化へ向けての研究を行っている。主な著作としては、「建築教育とCAD(略)」(情報処理学会)、「建築CADテキスト(略)」(日本大学)、「建築教育と建築プログラミング(略)」(建築学会)などがある。最近、彰国社より「建築プログラミング」を翻訳出版した。(あがりますひろ)

野村みどり先生
(短大 非常勤講師・福祉住環境概論)

略歴

1974年 東京都立大学工学部建築工
学科卒業
1986年 東京都立医療技術短期大学
1998年 東京都立保健科学大学
2002年 東京電機大学情報環境学部
情報環境デザイン学科



後期、船橋校舎で「福祉住環境概論」を担当させていただきます。東京電機大学の千葉ニュータウンキャンパスに2001年度に開設された情報環境学部には、昨年4月から勤務しております。来年度には、大学院情報環境学研究科修士課程が開設される予定です。現在、情報環境学という新たな視点から、バリアフリーやユニバーサル環境デザイン、病院、学校、住宅、まちづくりなどについて教育研究を深めています。神田キャンパスでは、こどもの病院環境に関する研究会を年3回開催しておりますので、ぜひ、ご参加ください。

<http://www.nphc.sie.dendai.ac.jp/> (のむらみどり)

光の計画って？

角館政英

筆者略歴

1989年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了
1989年 TLヤマギワ研究所
1990年 ライティングプランナーズアソシエーツ(LPA)
1996年 ライトフィールドアーキテクト設立
2000年 角館政英光環境計画設立



光の計画は俗に「ライティングデザイン」「照明計画」とか言われている。また、この世界では「舞台照明」「照明器具のデザイン」と「空間のデザイン」が明確に言語として分かれてなく、「自分は空間の光を計画する者です」と初めて会った人には自己紹介する。建築を扱う照明計画として代表的なのがライトアップで、単調だった夜の都市を見たことのない光で一変させた。今の日本ではイベント性の高い演出的な光から、人々の生活の光の必要性が求められているのではないかと確信している。演出的な光はTDLとかに任せればいい。生半可な演出はもう私たちを騙すことができなくなってきている。

今、私の興味がどこにあるか説明する。

私が空間に光を配置する手がかりにしているのは「人の行為」だ。生活する中で必然的に生まれてくる人の行為を初めに把握し、分析する。例えば「廊下は歩くためのスペース」とするならば、住居内では真っ暗でも住民は歩くことができる。そしてこの考えがベースにあれば、そこからやっと光のデザインの余地が生まれてくる。特にこの傾向が強いのが、公共空間である道路や街路などのインフラである。これらはJIS基準を手がかりに計画が進められているが、この日本では、出かけるときも寝るときも、ドアに鍵をしない地域が存在する。このような地域での街路の計画は地域に合わせた性能を分析し、均一的な計画から地域性を重視した計画をどのように考えるかが今問われているが、実は照明からスタートする

と住民にとってはイメージしやすく、比較的簡単に同意を取りやすいのである。このときに注意しなければならないのが、ただ単に「明るい」「暗い」ということでなく、「つまづかないで歩けますよ」とかの性能について説明することが必要である。

私は照明によって建築、空間のコンセプトを伝えることも大事にしている。まず、その施設を利用する人とその行動を分析し、明確な照明プランを提案する。メインテーマを一言でいうとすると「光のミニマリズム」で、きっとこれは建築でいうミニマリズムと同じである。最小限の光で「人の行為」と「空間の力」を表現できることが目指しているところかもしれない。

あと、大事にしているのは自然な光。例えば、目の前に蠟燭の光があると、触ったら熱いだろうとか、近くは明るいけど遠くは暗い。とてもあたりまえの感覚を誘発させる。基本的には、このような光が空間の本質的な部分を素直に感じるができるものと信じてる。

私はそこに住む人に合った環境を光で考えると、そこには必ず人の行為やアクティビティーが見えてきて、これをちゃんと繋いであげることが今の私にできること。

建築には長い歴史の蓄積があって、その理論を光に置き換えるだけでいろんな発見があり、新しい可能性が見えてきて、面白さが尽きないんだな。

(かくだてまさひで・ライティング・アーキテクト)



岩手県大野村街路整備計画

家々の小さな光の集合体が夜間の街路の景観を形成し、住民の要望を満足した。街路に連立する街路灯のシンボリックな景観でなく、人々の生活が街路ににじみ出るような計画ができた。



八王子の家

建築設計：手塚貴晴・手塚由比
中庭をいかに居室と空間的に一体にさせるかが成功した。



山望園／
介護老人保健施設
建築設計：佐々木
龍郎
空間のエッジ部に今まで均一に配置されていた蛍光灯を寄せるだけで、空間が明確になった。

浮上系

小泉雅生

筆者略歴

1986年 東京大学工学部建築学科卒業
 1986年 シーラカンス共同設立
 1988年 東京大学大学院工学系研究科建築学
 専攻修了
 1998年 C+Aに改組
 2001年 東京都立大学助教授



私が最初に設計をした建物は、木造の小さな別荘でした。当時私はまだ大学院の修士課程に籍を置く学生でしたが、縁があり、在学中から実際に建物を建てるという機会に恵まれました。それを機に同じ研究室の仲間とともに「シーラカンス」という名の設計事務所を立ち上げることとなりました。研究室内の雰囲気そのまま移動したような形での事務所のスタートでした。

その別荘は樹木の生い茂る斜面上に細長く伸びていく平面形状の建物であり、斜面の勾配にあわせて建物内部の床が徐々にあがっていき、その上部に一枚の切り妻の屋根が水平に置かれるという構成となっています。もちろんそれまで何枚か実施図面の手直しの手伝いをしたことがあったくらいで、きちんとした図面を描いた経験などなく、先輩の助言を受けながら何とかそれらしい図面を書いていたといった程度だったのですが、いざ現場が始まり、斜面上に地縄を張って建物位置を確認する段になって、つまり私の引いた線に基づいて樹木が切られ、整地されるという現実を目の前にして、本当にこの建物でよかったのか、本当にこの位置で大丈夫なのか、急に不安になったことをよく覚えています。若さの勢いで図面を描いていたものの、遅ればせながら自らのひく一本の線の意味の重さを実感し、一本の線の怖さを知ることとなったわけです。最近はコンピュータで図面を書くようになり、一本の線の重みをさらに実感しにくくなっていくような気がします。

さて、私はこの建物にBUOYANT（浮力のある、上がり気味の）という名をつけました。屋根がガラス欄間で下部の構造体と見切れ、林の中に一枚の板が浮かんでいるように見えることを表現しようとしてつけた名前ですが、深海に潜むシーラカンスがこれから洋上に浮上するのだ、というようなちょっと気負った気持ちもありました。さらに開高健の小説で見つけた「漂えど、沈まず」（*fluctuat nec mergitur*）というフレーズに魅せられて、不要に力を入れずに悠々と洋上をわたっていくというライフスタイルをもBUOYANTという言葉に重ねあわせていました。いま思うと建物の名前一つにずいぶん大仰でしたが、何しろ初めて設計した建物であり、相当な思い入れがあったのです。実際に事務所を始めてみると、走り出したら止まることさえまならず、「漂えど、沈まず」という悠々たるペースとは程遠い毎日です…。

あらためて振り返るにつれ、日常に埋没することなく常に浮き上がる力を持ちつづけることはかなり大変なことです。特に学生諸君からすれば、建設業界の先行きが不透明な現在、前向きな意識をなかなか持ちにくいのかもしれません。しかし、学部生・院生という時期は、前途洋々たる大きな可能性を持った時期です。暗い世相に引きずり込まれて、意気沈降することはありません。ぜひとも、これから可能性を開いていく、浮上系の姿勢で臨んでほしいと思います（自戒の念も込めて…）。

（こいずみまさお・非常勤講師）



「BUOYANT」シーラカンスコ小泉雅生（1987）
 （撮影：C+A）



研究室紹介

野村研究室

野村歡教授，八藤後猛助手

野村 歡

研究室の歴史

恩師木下茂徳先生（第8代理工学部長，元日本大学総長）が昭和20年代後半に社会福祉施設に建築学のメスを最初に入れたことに始まる。爾来，先生はこの分野に多くの業績を残されてきたが，野村研究室は，石田研究室（石田道孝講師）と共にこの研究分野を継承する形で，1969年に卒業研究の学生を迎えたことに始まった。今年の4月で34年目に入った。

研究室の構成

現在は建築学専攻の社会人大学院博士課程の院生3人を筆頭に，修士課程2年2人，また，医療・福祉工学専攻の修士2年1人，1年1人，さらに学部学生18人を八藤後猛 助手と共に指導している。

特に今年度の院生構成は，一流設計事務所勤務を辞めて特別養護老人ホームを経営している者や女流建築家，理学療法士・看護師の資格を持つなど多彩である。

研究テーマ

当研究室は同じ流れを汲む石田研究室と共に，高齢者，障害者や子どもが安全・安心・快適な生活ができるように，住宅・社会福祉施設・公共的建築物・公共交通機関などの生活環境整備のあり方，すなわち，バリアフリーデザイン，ユニバーサルデザインの研究と普及に努めてきた。最近では，高齢者や障害者に対する配慮を行うことがかなり多くの人びとに理解され，法律面でも，ハートビル法，交通バリアフリー法が制定され，実際の生活環境面でも，公共・公的大規模建築物や交通機関が利用しやすくなってきたが，当研究室は，これらの動きに大きな貢献をしてきたと自負している。

現在は，これまでの高齢者や障害者を対象とした研究に加え，少子化傾向が国にとって大きな問題となっていることから，乳幼児や学齢前の子どもの生活環境についても力を注いでいる。特に，子どもが安全に住宅内で生活できるような環境整備のあり方について，実験を含めて精力的に研究を展開している。

卒業研究の進め方は，4，5月は研究室のテーマに沿



施設見学



バーベキュー大会

った内容の新聞記事を卒研生各自が切り抜き，コメントを記したものを材料に，野村・八藤後が解説を加え，この分野における現代的意義と社会の動きに関心を持ってもらうことにしている。具体的な卒研テーマは研究室で指導できる範囲内の内容であれば，基本的にできる限り自分でテーマを探すことを学生に求めている。ただし，研究内容は重箱の隅を突つुकことではなく，テーマが小さくとも，「社会の一遇を照らす」内容であって欲しいと常に考えている。

卒業制作のテーマは学生に自由に決めてもらっているが，必ず高齢者や障害者が利用できる内容にすることを求めている。

研究室の年中行事

今年は，例年とは若干趣きを変え，5月に奥多摩でバーベキューを行いお互いの親睦を深めた。8月の夏休みに入って理工学部セミナーハウス（八海山）にて合宿を，お正月には同じ場所でスキー合宿を行う予定にしている。「よく遊べ，よく学べ」をモットーに。そのあとの1，2月は卒業研究のまとめで徹夜組も毎年大勢いる。

なお，さらに詳細に当研究室を知りたい人は，次のホームページを参照されたい。

<http://sociotech.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

（のむらかん・教授）



安全計画のための，手すり柵の乗り越え実験

建築材料施工研究室：清水研究室

清水五郎教授，斉藤俊一助手

清水五郎

バンテアイ・クディ
遺跡の西回廊門正面



研究室の歩み

自己紹介のつもりでこれまでの動向をふり返れば、海洋建築工学で長くお世話になった後、現在の建築学科に所属するようになってすでに6年が経過したが、幸いにも、一貫して研究室を預かることができ、材料施工分野で活動の場を与えていただいている。研究室名に「施工」を付したことについては、海洋施工を含めて15年間授業を担当してきたこと、この間に多くの建築現場を見聞し、特に、本四架橋の海中コンクリート工事を通して施工の長期実体験を得たことなど、守備範囲の拡大に努めてきた名残でもある。

その他、大きな自己改革には、ODAによる約1年間のフィリピン工科大学勤務(1987)があり、この貴重な体験によって以後の国際交流が極めて円滑になり、研究や教育内容にも好影響を及ぼす結果になっている。

研究内容の動向

●これまで

当研究室出身もしくは深く関連を持った博士の資格者は現在9名を数えるようになった。課程博士4名(留学生)、社会人3名、論文博士2名の内訳である。研究室の主テーマはしばしば所属する院生の動向を反映することになるが、当研究室では、海中電着物の電着技術に関する研究からはじまり、ヤシの実繊維補強コンクリートの物性、無接水トレミー工法の提案、アパタイトスラグの有効利用、吸水率に基づくコンクリートの品質評価法などの研究内容に現れている。この内、“ヤシの実…”に関しては、ブラジル、イギリス、オーストラリア、マレーシアで開催された国際会議での発表があり、著名な教授や研究者との出逢いと交流が実現した。無接水トレミー工法については現実に採用を検討してほしい水中施工コンクリートに関する新技術の提案であると今でも自負している。

●いま

現在進行中の2、3の研究内容を紹介させていただくと次のようなものがある。火山礫コンクリートをRCプレファブ用小部材に用いて簡易なユニット構造体を組み立て、それらを立体、平面的に配置することによって低

層住宅、市場、校舎、倉庫などの建設に供しようとする開発研究である。これはフィリピン工大と理工学部の建築系複数の研究室との間で共同研究として進められている。現在、現地においてモデルハウスの試作に取り組む段階にある。本件については、関連記事「フィリピン工科大学滞在記」(2003年学期末号)を参照いただけたら幸いである。

同時進行中の研究にアンコール遺跡の材料学的調査研究がある。砂岩で構築された巨大な世界文化遺産に対する保存と科学的解明を目標とした国際学術調査プロジェクトが活動中で、1993年以来、継続して参加する機会を得ている。

一方、韓国ソウル市の中心街に立地する歴史的建造物明洞大聖堂(煉瓦造)の修復工事が着工されようとしているが、外装煉瓦の耐久性向上に関してお手伝いをさせていただいている。これらの調査研究は、カンボジアを含めて建築史・建築論研究室と歩調を共にしている。

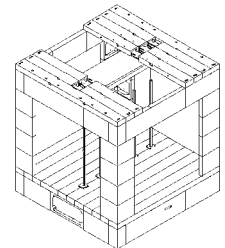
●これから

環境問題と関連して木材を再検討する時期にもあることから、LVLや集成材を中心とする“木質系材料”について開発研究を推進しようとしている。視点は、木造建築の解体に伴って廃出する古材を接着加工してリサイクルに向けようとするもので、外部との共同研究も視野に置いている。一方、2年生を対象とした材料実験においても、本年より従来の「セメント」に替えて「木材」実験を加え、内容の刷新を計っている。

最後に

材料施工分野を“3K”と称したのははるか昔の話で、今や建設現場はどこよりも整理・整頓がゆき届き整然としている。端材、廃材、産業廃棄物も資源化や再生のための研究の対象となり、新たな未知の分野が見え隠れしている。学生諸君の熱いまなざしを大いに歓迎する次第である。

(しみずごろう・教授)



■吉野泰子短大助教授は、小石川正男短大建設学科長及び短大建設学科教室と共に、3月21日から30日まで、劉加平氏（西安交通大学主任教授）、張繼良氏（陝西省商洛師範專科學校校長・教授）の2名を日大理工学部客員研究員として受け入れた。尚、劉氏らと日本大学との共同研究は、中国国家自然科学基金委員会から国際協力の優秀プロジェクトに選ばれ、昨年10月、上海で開催された国際ワークショップでの論文（連名 関口克明、劉加平両教授）に対して、国際ジャーナル誌特集号への投稿依頼を受けている。

■田所辰之助短大専任講師、矢代昌己短大非常勤講師の執筆による『作家たちのモダニズム—建築・インテリアとその背景』（黒田智子編、学芸出版社）が刊行された。

■上利益弘非常勤講師・短大非常勤講師の論文「建築デザイン教育におけるデジタル・テクノロジーの導入に関する考察」が、情報処理学会研究報告No.119（2002年）に掲載された。

■大平貴臣君（今村研M2）、丸吉泰道君（同左）の「4棟の京町屋」が、「第3回京の町家学生設計コンペティション 最優秀作品賞」（主催：京都建築青年経済協議会）を受賞した。「10坪京町



4棟の京町屋 模型写真

教室ぷろむなーど

家」をテーマに、京都市中京区の実際の敷地に4棟以上の町家を計画するというもので、最優秀作品は建売町家として実際に建築されて販売される。受賞した2人は、今後、実施設計から現場監理までを体験する。詳細は次号で紹介の予定。同賞については、[http://www.hal-kyoto.com/machiya/]を参照のこと。

■佐藤慶延君（本杉研M2）の「CHIMAERA」が、「第13回エス・バイ・エル住宅設計コンペ 光源氏の家 佳作」（主催：エス・バイ・エル株）を受賞した。「光源氏の家」をテーマに、悩み多きスーパースター光源氏の住む家への提案が求められたもの。同賞については、[http://www.sxl.co.jp/corporate/competition/index.html]を参照のこと。



CHIMAERA 平面図

■落合正行君（高宮研M1）の「せかいでいちばんながいほいくえん」が、「2003 リフォーム・リニューアル・コンバージョン 設計アイデアコンテスト入賞」（主催：建築リフォーム・リニューアル・コンバージョン展・組織委員会）を受賞した。本案は、「2002年度卒業制作優秀作品集」に掲載されている。同賞については、[http://www.refo.

co.jp/RRC2003/RRC-cntst.html]を参照のこと。



せかいでいちばんながいほいくえん 模型写真

■3月15日、「AD2003」が小泉雅生氏、佐藤光彦氏、杉千春氏、曾我部昌史氏、西沢立衛氏の5名の建築家を審査員に行われた。応募された卒業制作20作品から、「AD2003」が北村直也君（若色研）「カステラマンション」に、修士設計7作品から、「AD2003+」が末岡佐江子さん（高宮研）「東京外国語大学跡地における都市再生住宅と公園の設計」にそれぞれ決まった。



東京外国語大学跡地における都市再生住宅と公園の設計 模型写真

平成14年度修士就職先・研究課題追加大学院博士後期（博士）課程
学生番号：D-0002
氏名：許 永東
論文題目：吸水率一時間曲線に基づくコンクリートの品質評価に関する実験的研究
進路・就職先：未定
専攻：建築学
研究室：清水五郎研究室

● 駁建目次

(2003.7 Vol.31 No.2 通巻124号)
表紙 「RPGビル」
設計：スタジオ・ヴォイド
照明計画：角館政英
撮影：角館政英

資格をとろう！

新任講師紹介
私と建築

2

10

12

研究室紹介

野村研究室

建築材料施工研究室

教室ぷろむなーど

14

15

16

【駁建】 発行者・片桐正夫：千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
■編集委員：本杉省三・岡村武士・根上彰生・重枝 豊・渡辺富雄・石垣秀典・佐藤慎也・星 和磨 ■印刷：奥村印刷株